

中国語教師研修プログラムに参加して

裴 崢

2011年8月8日から20日まで、私は中国教育部（日本の文部科学省にあたる）直属の漢語教育機構、中国の「漢辦(漢語教育弁公室)」とやはり中国の「孔子学院」によって主催された中国語教師研修プログラムに参加した。漢辦は対外中国語教育の専門機関で、孔子学院は中国内外の大学が連携して中国語や中国文化を広める非営利的な教育機構である。

中国の改革開放政策の推進に伴い、諸外国における中国語教育の需要は高まってきた。教職育成を専門とする北京首都師範大学では、20年前(92年)は在学留学生が60人しかいなかったが、今は長期留学生1,500人、短期留学生2,000人と大幅に増加している。留学生の増加からも伺われるように、世界的に中国語修学者は増加の一途を辿っている。以前は対外中国語教育を専攻した大学卒であれば誰でも中国語を教えることができ、英語などの第二専攻を持つ者さえ就職の保険措置として取り組めたが、今は応用言語学、現代漢語、あるいは文学専攻の博士であっても、この分野にはなかなか参入できないほど対外中国語教育を専門とする適切な人材が育成されている。中国政府は前述のような機関を設置し、需要に応じて、海外の中国語教育者向けの多彩な教材資源と研修プログラムを提供し、中国語教育全般の向上及び充実に努めている。

今回私が参加したのは北京語言大学教師研修学院で実施された夏季研修プログラムであった。北京語言大学は中国で中国語・中国文化の教育を担当する唯一の高等教育機関であり、教師研修学院は外国における中国語教師育成・研修の専門機構として、教育部の認可を得て1987年に開設され、海外の外国人教師に限らず、中国人教師をも対象としている。申請手続きは面倒であったが、結果的には参加でき、この研修で習ったものを大事にしたいと思える内容であった。

私と同じプログラムに参加した24人は、小学校から大学までと教壇のレベルこそ異なれ、全員がそれぞれ韓国、アメリカ、ドイツ、イタリア、スペイン、スイスなどの様々な国から来た、中国語教育の現役教師であり、中でも韓国からの参加者は14人と最も多く、一方で、日本からは私を含めて2人だけであった。

毎日午前4コマ、午後2コマの講義は、異なる教授法や教室活動、心理学から見た言語教育、またはメディアの活用、新教材の開発、中国語検定試験の紹介など、幅広い内容が用意された。講師自身の授業実践報告とサンプル授業の録面上映を通して、授業の展開プロセスと学習者の反応及び学習効果を生き生きと見せてくれた。いかに活発な教室活動が学習内容の理解を助けるかについても、数多くのゲームやテクニクを演じて見せ、多いに示唆されるものがあった。

午後の講義終了後、4時から6時までは書道、篆刻、水墨画、切り紙などのいわゆる中国文化の体験イベントも組み込まれた。週末には更に研修参加者同士の授業計画交流会が催された。出欠までは記録されなかったものの、講義開始5分前の出席が要求され、宿題や発表、レポートなども日々課された。理由無き遅刻、早退も認めない。これらの規則を守り、宿題などもきちんと完成した場合は漢辦と北京語言大学の修了証書を受領できる。20%の規則違反があれば修了証書は得られない。実にハードなスケジュールであるが、内容の濃いプログラムでもある。久しぶりにエネルギ

ッシュな学生気分に戻ることができ、わくわくした毎日だった。どんなことを学び、考えさせられたかについて、自分なりの理解と認識を加え、整理しておきたい。

1 言語教育の目標

中国語では学校の「教育」については「教学」と称し、教育現場に立ち会う教師と学習者双方の教え／学ぶという関係を示す表現となる。日本語では「教える」という意味なのか、それとも「教え／育つ」という意味なのか。それは別として、母語ではない言語の習得は外国語教育と言い、中国でも日本でも一般的に英語教育を第一として、他の外国語は順次、第二、第三…外国語教育と認識される。概して言葉の学習なので、ここでは、第二外国語教育とも中国語教育とも言わず、単純に「言語教育」と統合したい。

講師は開口一番、「皆さんが何が専攻なのかは重要ではない。重要なのはいかにこの仕事を重視しているかだ。中国語の話せる人なら誰でも中国語を教えられるとは言えない。中国語を教えることは中国語を話すこととは違う」と言い切り、何を教え、どのように教えるかという教育目標、及び教授法が問題であると述べた。

言語教育の目標は言語の応用力、具体的に「聞く・話す・読む・書く」という4技能を通じた総合的な「交際力」の向上を目指すことである。昨今の教材は概ねこの趣旨を踏まえ、日常的な場面——人間と社会の関わり及び活動を表現する内容——を基本とし、実生活に似せて設定された言語環境に学習者が自らを置き、興味を持ちながら対象言語の学習及び練習の反復を通して効果的に理解し、身につけていくものである。

講師は4技能の傾向を次のように述べた。4技能とも重要であるが、基本的な交際力に目的を絞れば、まずは聞き取れて受け答えができる力、いわば会話を成立させ、継続させる力が求められる。聞けて、話せて、初めてより高い技能——読解、作文——へ力が伸びる。また、聞くと話すという2技能の中では話せる方が先決ではないかというのである。この考え方は1962年の北京語言大学の創立以来掲げている教育主旨に脈づいている。すなわち授業中、対象言語の使用を徹底するのである。

そのためには基本となる語句、短文表現の積み重ねが必須となる。学習教科書の練習例を活かす一方で、さらに身近な場面を取り上げ、応用しやすい問答の繰り返し練習を設定した方が効果が上がるという。学習者が身近な場面を通して学習内容の理解を深め、実践を体感しながら学習内容をやがて知識として定着させていく。知識は与えられるものではなく、学習者自身の認識と理解などで自ら組み立てていくものだ。自身の様々な体験、認識、理解などと融合できて初めて知識に向けての喜びと向上となり、力強い知識となる。ゆえに「体感」すなわち実践は重要である、という点が強調された。

しかし、語学を勉強する時、誰でも多かれ少なかれ間違いを恐れ、しばしば自信なさゆえの困惑、あるいは薄壁に悩む。そのため学習者に勇気と自信を持たせる授業が望ましい。教師は知識を学習者に手渡すだけでなく、学習者の潜在的な経験、感性及び能力を引き出し、新しい知識への欲望、情熱、成就感に気付かせる役割を担うべきだろう。学習者自身の経験を呼び起こしながら、新しい知識を与え、新しい知識に近づくよう働きかける中で学習者側には勇気と自信が湧く。

では、どんな教授法が最適なのか？ 便利な既成の教授法はないと講師たちは口ぐちに述べた。既存の様々な優れた経験を踏まえながら、学習者の状況を見極め、自ら規則を見つけ、より適切な教授法を模索し、改善し、徐々に確立するしかないというのである。なるほどである。

続いて、受講した各種の講義の主旨を「導入」、「単語」、「文法点」、「本文」、「練習」という授業展開の5段階に分けて紹介し、これを機に、これまで筆者が授業を通して模索していたものを合わせて整理したい。

2 授業の展開

2.1 「導入」―― 温故而知新

授業の最初には、学習者の集中力を高め、気分を落ち着かせるために、筆記小テスト、あるいは教師と学習者との質問や話しかけなどの会話を通して授業の導入とする。前回学習した重点及び難点を取り上げて、学習者の習得度を確認し、学習者にとっての問題点を把握する。裏を返すと、このウォーミングアップは「温故而知新」というが如く、復習の時間でもある。

私としては教科書の単語、本文などの朗読や会話のやり取りでウォーミングアップ及び復習に充てている。この際心がけたいのは、学習した語句や文型を踏まえながらも、それよりもやや難しく、背伸びした内容を学習者に与えることである。単語から短文へ、短文からやや長い文へ、長い文から受け答えへ、繰り返される練習の中で単語を熟知し、語の組み合わせと語順の配列に気付かせ、場面ごとの意味合い、語感及び更なる応用を体感させ、学習の効果を上げることをねがっている。注意すべき点は、教師がどの程度の言葉を選んで使い、どの程度の難易度を設定するかである。難しすぎもなく、物足りなさもなく、学習者のレベルに合っており、その意欲をやや高められればよい。また、指名よりも学習者全員の受け答えを主とする方が時間内の効率が高い。まだ自信がない、勇気がない学習者には「誤魔化す」チャンスを許すことになるが、それも必要なことだ。彼らを守る時も必要だ。

教師の話や問いかけはそのまま学習者にとっては聞く練習となるが、それだけでは学習者の話す力、交際力はそれほど大きくは伸びない。学習者は中国語の知識というよりも、中国語そのものを習うのであり、繰り返す練習の中でこそ中国語のセンスを磨き、中国語を身につけることが可能になる。したがって、学習者自らの実践が大事である。

2.2 「単語」―― 字から語句を生む醍醐味

人間はなぜ話すのか？ 話したいから話す。つまり最初に話す欲望があり、その後から言葉が見つかるのだ。

教科書によって、「新出単語」の量は異なる。多寡に関わらず、そのすべてを一律に扱う必要はない。文法、本文の理解に役立つ重要な単語、または頻度がより高い、あるいは間違えやすい、難しい単語、熟語を抜き出して学習し、特に必要な基礎単語は異なる形で繰り返し練習し、覚える。

単語よりも先に文法を習うという構成もあるが、新しいものを学ぶ時は単位が小さい方が理解しやすいため、私は単語を先に学んだ方が自然だと思う。交際力を高めるにも、単語の積み重ね、語彙の蓄積が文法知識より役立つのではないかと考える。語彙が豊富な上、文法も正しいことに越したことはないが、どちらとも思い通りにならない場合は、文法の間違いがあっても、必要な単語さえ覚えていれば、一応は表現したい願望や情報を相手に伝え、基本的な意思疎通を果たすことができるからである。

実際に単語学習については、講師が「展示」、朗読、説明、発展などの方法を紹介してくれた。これらの方法は単語に限らず、文型や文の学習にも適合するだろう。

まず「展示」については、単語表あるいはカード、図、声、実物、媒体、PPTなどが扱われた。

しかし日本人学習者にとっては、単語の「展示」はそれほど必要ないと思われた。私は以前自作の漢字、ピンイン(中国語の発音記号)の両面単語カードを使っていたことがある。漢字を素早く認識すると同時に、ピンインを正確に発音できるようにするためだった。が、学習者には有難迷惑だった。漢字に自信がある学習者にとっては、「声」だけ、発音だけの単刀直入な方が、単純明瞭で耳元に残るようだった。とはいえ、簡体字については注意すべきである。「教室」、「学校」といった日本語の常用漢字となっている単語であれば、理解するのも書くのも全く問題ない。しかし「図書館」、「経済」というような簡体字は、日本語の「図書館」、「経済」とは異なり、理解できても書き間違えやすい。さらに「考試」、「卒業」などのような日本語の「試験」、「卒業」とはかけ離れた簡体字もあるため、しっかり覚える必要がある。

カード展示は不評であったが、私は時に単語学習の前に、まず学習者に分からない、理解しがたい、また特に覚えづらい、間違いやすいといったことが予想される日本語の漢字と意味が異なる単語を抜き出して黒板に書かせる方法を用いている。予習の押し付けにもなるが、予習して来なくても、その場で新出単語に集中できる。また個々の単語に対する学習者と教師の注目度のズレがしばしばあられ、両者の感覚及び認識を把握する過程ともなり、学習の進捗やその後の展開の舵取りをする上で有意義であろう。

具体的な場面を想定した単語学習も意味の理解に役立ち、学習者の興味も誘う。たとえば服装や靴、色などを習う時、平日、雨天、運動、宴会などの場面を想定して、それぞれの場面にふさわしい、あるいは個人で好みの格好、持ち物、合わせ色などを問いかければ、学習者は自分の日常と結びつけながら今習っている無表情な単語を生き生きと使うため、記憶に残るであろう。

朗読については、日本人学習者にとっては漢字に対する認識はさほど問題ではないが、学習しなければ発音としてのピンインが読めないという問題が発生する。この発音記号はローマ字表記を採用しているものの、発せられる音は英語とはまったく異なっている。教師は例示の読みでは、声、速さ、語気を換えて読み、品詞別に分類して読み、さらに板書を見て読み聞かせたり、読ませたりする。新出単語の発音練習であっても、教師の引導や学習者の記憶を呼び起こし、古い単語、同義語、多義語、引いては熟語、短文、文をさらえる。過去に学習した内容がどれほど多く思い出せ、多く展開できるかを確認することで学習の意欲も高まる。

説明については、日本の教科書の多くに単語に日本語訳が付いているように、説明は学習者の母語による翻訳法となっている。その他に、学習者の母語または第一外国語(英語)の力を借りて比較法で中国語との相違を指摘し、中国語への理解を深めたり、あるいは学習者の母語を借りずに、教師の動作、表情、あるいは写真、図解を介して単語の意味を理解させたりする直接法、さらに一つの単語から関連のある多くの単語を推し量るという発展法も紹介された。

大学生の学習者にとっては、この発展法が有効だと思う。これは単語表の順序を構わずに、品詞、意味などによって新たに並べ替えて学習し、古い知識を生かして類推、連想をさせるという方法である。たとえば字から語彙へと発展させる。つまり造語力の強い語であれば、朗読練習の時と同じように、過去に習得した同義語、対義語、動名詞の連語などに関連した課題を出して回答させ、新しい単語の説明とすることができる。たとえば、名詞の場合、生日(誕生日)→生日聚会(誕生日パーティー)、生日礼物(誕生日プレゼント)、生日贺卡(誕生日祝福カード)、生日快乐(誕生日おめでとう)、生日歌(誕生日ソング)、生日蜡烛(誕生日キャンドル)などと広げていく。動詞の場合、異なる目的語との組み合わせで熟語を増やすように、「上班(会社に行く)」は、「上がる、行く」という意味の動詞「上」+目的語「班」との組み合わせであるが、過去に習った「上

課（授業に行く）」、「上学（登校する）」という同質の熟語を復習することができる。習得済みの名詞「网（インターネット）」「车（バス、車）」と連結させれば、「上网（インターネットをやる）」、「上车（バス/車に乗る）」、という熟語、さらに「上午（午前）、早上（朝）」というような名詞の復習もできる。このように、「上班」という新しい熟語の構造に気付かせ、記憶を深める。または问（尋ねる）—问路（道を尋ねる）—路灯（街灯）—灯光（明かり）—光明（光り）—明天（明日）…というように、漢字文化特有のしりとりゲームも利用できる。

さらに単語から短文へ、短文から文へと展開していくこともできる。中国語の量詞(助数詞)は日本語よりも多くて複雑なため、学習者にとっては一つの難点だ。「この自転車」、「この本」、「この人」という日本語の「指示代名詞+名詞」の組み合わせに対して、中国語では「指示代名詞+量詞+名詞」の組み合わせなので、「这辆自行车」、「这本书」、「这个人」というように「辆（輛/台）」、「本（冊）」、「个（個）」などの量詞が必要になる。単語に応じて必要な量詞と合わせて取り上げれば、大量の量詞をただ漠然と暗誦するより効果があると思う。たとえば「自行车（自転車）」という単語を習う時、「一辆自行车」→「两辆自行车」と量詞を加えて練習させ、更に「新自行车」→「一辆新自行车」へと修飾語も増やして練習できる。文を習う時、たとえば「买了一辆新自行车」→「买了一辆新自行车」へと文を引き伸ばしていく。

字から語句を生みだす醍醐味を味わえれば、話したい時に見つけられる言葉も自然と増えるであろう。

2. 3 「文法」— 本質は語の組み立て

ではどのように話すか？ 見つけた言葉を文に組み立てればいいのだ。日本語は粘着語と言われる。助詞があるため、「私は英語を6年間習った」、「私は6年間英語を習った」、「英語を私は6年間習った」など、語順の入れ替えができる。しかし、中国語は助詞のない孤立語なので、「我学了六年英语」と語順は決まっている。それぞれの語を文法上の意味、機能、形態にしたがって組み立てなければならない。文が違くと語の組み立ても違い、語の異なる組み立てによって意味が変わっていく。中国語の文法は語順、語の組み立ての学習と言っても過言ではない。

「私は英語を6年間習った」という意味の文法を教える時は、中国語の「S+V+了+数詞・量詞（助数詞）+O」という語順を明示し、「我学了六年英语」などの例文を通して語の順を説明し、意味と用法を確認する。該当文型を説明する例文はできるだけ典型的なものとし、特に次の3原則に注意すべきだと言われた。

- ① 簡単、短いほどよい。
- ② 明確、多岐ではない。「咬死猎人的狗」というような文であると、噛み殺したのは狩人の犬なのか、狩人なのか分かりにくいいため、良い例文ではない。
- ③ 生き生きとする。

講師は、自身が語順の重要性を教える時に、使っていた例文を披露してくれた。昨今の中国では整形ブームとなっている。ある女性が目の二重まぶた整形術を受けた。その出来栄えに対して、講師は「大不一样（様）」、「不大一样」、「不一样大」と同じ4文字を違う語順で評した。「（前と比べて）だいぶ変わった」、「（左右は）あまり釣り合わない」、「（目の）大きさは違う」と3通りである。3つ目の結果だったら、当事者はショックだろう。この例を聞いた私たちも笑いながら、語順の重要さを印象深く再認識できた。

副詞のような抽象的な語の語順、意味合い、用法を説明する際は、同義語などがよく利用される。

その際も利用する語をよく選別すべきだと注意され、授業実況のビデオを見せてくれた。「全」の意味を理解させるため、教師が「全部、完全」を取り上げていた。しかし、「全部」は「全」と同じく「すべて」という意味で、適切であるが、「完全」は「整個（丸つきり）」という意味なので、「全」の解釈としては無理があった。もし学習者から「完全」の例文も要求されたら、教師が解釈しきれず面倒に陥るだろう。ゆえに、教師は任意に例文などを挙げるべきではない、とりわけ初級の段階では不必要な混乱を与えるべきではない、という点が示唆された。

例文での説明、理解に合わせて応用問題を出し、学習者の習得度を確認する場合には、応用問題の難易度も配慮すべきである、1+0ではなく、1+1であった方が妥当だと指摘された。たとえば判断・説明動詞の「是」については、例文の「我是学生」から「你是～」→「他是～」と主語を変えたり、「我是大学生」→「～留学生」→「～研究生」と目的語を変えたりして、応用の度合いを少し高めていく。または教師が学習者に問いかけるようにすれば、学習者の反応を鍛え、能動的な授業参加にもなる。与える応用問題がやさしすぎると、学習者の意欲を損なう。学習者にとっては実力よりやや高い課題の方がやりがいがある。

なお、複合文、長い文については、語の組み立てを確認する際、中心となる語、短文、句の繋がり、大事な情報の個所、または構文上の規則と論理性に注目するように指導することについても触れられた。

2. 4 「本文」— 朗読の体感で理解へ

言葉があって、はじめて文が組み立つ。人の年齢、学歴、体験などによって、組み立てる文のレベルは異なる。またその場面に適切であるかどうかという「語用」の問題もある。すなわち自分らしく話し、語順、場面に対して正しく話すことだ。すると「文法」、つまり文の組み立てが分かって、さらにどのように使うかの問題があるのだ。もちろん、学習の段階が必要である。初級ではまず話すことを目標とする。中級は話して通じる。上級は適切に、センス良く話すことが目標になるだろう。

「本文」の学習はまさにその場面に必要な語句を正確に組み立て、適切に伝達することを実践する場だ。「本文」の学習について、今回の研修ではA、Bの2種類の方法が紹介された。Aは学習者が本文を見ないまま教師の読みを聞き、真似をする。意味が分からなくても単語と文法の学習を経ているため、繰り返し聞き、発音しているうちに、内容も徐々に把握でき、理解が深まるはずである。Bは学習者が本文を見ながらCDや教師の朗読に従って音読みした後、教科書を伏して、教師との会話や質疑応答の形で音読みした本文の内容を思い出し、情景の設定や質問、文脈を利用して意味を確認する。

いずれの方法においても、本文の学習についても、朗読を重視することは同じである。言葉は耳で聞いて覚えるものなので、私も本文の繰り返し朗読が理解に役立つと思う。日本人学習者にとっては、漢字から意味への連繋も容易であろうが、発音と意味との繋がりには邪魔されることが多いので、朗読がなおさら大事である。全員朗読、男女輪読、役柄朗読、単独朗読、または教師が文の前半、学習者がその続きを読むというリレー方式、長文や複合文なら文脈を踏まえた区切り読みの後、完全な文を読むように、様々な読み方を心得ればよい。

特に初級における自己紹介、家族構成、時間割、スケジュール、趣味など、叙述式の短文では、この多様な読み方を暗誦にも利用できる。まず叙述の流れを学習者の母語で整理し、次に教師から質問の形で全員で、または指名して叙述の内容を答えさせる。いきなり全文の暗誦ではないので、

難しくない。続いて教師が読み上げた文の区切りを一斉に復唱する。さらに教師が読み上げた前の文に続けて、後の部分を繋げる。最後に全文の暗誦で仕上げる。応答、区切り読み、復唱、暗誦などを通して、言葉が「決まった」語順で、その場面を適切に表現することを理解し、実感させるのである。

このように同じ内容の繰り返しではあるが、異なる読み方にすれば、学習者が飽きず、学習の効果も期待されるであろう。教育心理学の講師は、教育の目的を達成するには「騙し」も必要だと断言していた。

2. 5 「練習」――話すことを目指せ

本文に続くのは「練習」である。「練習」の目標は先に学習したものを実践し、記憶を定着させ、学習者のより活発な応用力、想像(創造)力を引き出すことにあると言われた。これは難しい！日本人学習者は個別の発音、発言などの授業参加が遠慮がちで、筆記「練習」以外に、気軽に声に出し、教師对学习者、一对多数、学习者同士の会話「練習」の場を作り、話す雰囲気を作るのにも四苦八苦なのだ。

今回は具体的なやり方を体験できた。教師が授業内容に合わせて、学習者の日常場面、状況について問かけや課題を出す。初めはみんなで答える。大多数が応答できたら、宛てて答えてもらう。個人での受け答えになっていても、すでにみんなと一緒に練習していたため、緊張が和らぎ、完成度が高い。練習をスムーズに進めるには文型の定着が前提であり、しかも答えの文型が先、疑問文を後に回す方がやりやすい。方式については、「我喜欢喝咖啡(私はコーヒーを飲むのが好きだ)」、「他(かれ)喜欢喝咖啡」というような「渐进法(漸進法)」もあれば、「以字带句(単語を以て文を作る)」、「単語→短文→文→複合文」というやり方もある。

研修では文作りの練習を実際にさせられた。講師が最初の人に指定の語で熟語を言わせ、次に「動詞」を、「主語」を、「助動詞」を、「副詞」を、「時間詞」を…加えて、復唱させる。「茶→紅茶→喝紅茶→我喝紅茶→我喜欢喝紅茶→我最喜欢喝紅茶→我以前最喜欢喝紅茶→我爸爸(父)以前最喜欢喝紅茶…」というように展開していく。前の文をちゃんと聞かなかつたら、復唱できないし、課題の品詞を入れる語順にも困ってしまう。次の課題は何なのか、今度は誰の番なのか、緊張しながら、私たちは無意識に講師の拍子に嵌まり、いつの間にか語を熟語へ、短文へ、長文へ、叙述文へ、描写文へ、簡単な文から複雑な文へと、少しずつ立派に発展させていってしまった。語順、文法の再認識にもなるとともに、皆で達成感の喜びを分け合うこともできた。

教師对クラス全体の練習問題の雰囲気作りが軌道に乗ったら、学习者同士の対話、またはみんなの前で任意のペアで会話をさせるのだ。北京語言大学の留学生夏季集中講座では、このような授業見学のチャンスにも恵まれた。受講者同士と任意ペアの練習はまったく同じ課題で、繰り返しになるようだが、組み合わせが違うため、必ず新しい内容、予想できない展開が生まれ、受講者は興味津々に練習に励んでいたように見えた。クラス全体の練習と個別練習の比率は3対7でバランスがよいと指摘された。

このように朗読の合唱、輪唱、独唱、課題の重複、創作など、歌を歌う、リレー試合をするような形を利用し、教師はその都度正確な発音を求め、間違いを正す。学習者にとっては発音が正しければ聞く力も伸びる。話す練習は同時に聞く力にもなり、また繰り返しの練習こそ文型の習得に役立ち、一石三鳥である。

授業の最後には当日の学習内容を簡潔にまとめる。人間が短時間で一遍覚えられるものは普通7つ

ぐらいが限度だと心理学の講師は言った。人間のこの特質を利用し、新たに学習した重要な単語を7つ取り上げて問いかけ、続いてその中から単語を2つ以上選び、新しい文型で文を作らせることによって、学習の達成度を確認すればよいというのであった。

授業活動の展開について、さっそく2、3回だけであるが、真似をしてみた。話題を用意して、まず学習者との対話を何回か練習し、続いて皆に質問を用意させ、指名した人に問いかけ、答えてもらう。指名者は一人の場合もあれば、二人の場合もある。二人の時は、自然に互いに相談しながら答えた。普段互いに声をかけない両者の間に戦友、同志といった感の頼もしく微笑ましい光景も見た。練習を進める時には適度な緊張感が必要であるが、折を見て助け舟を渡し、リラックスさせるのも大事だと思った。

また質問はどんなものでも良いというわけではなく、適切で学習者の注意と思考を促すことができるものでなければならない。学習者の日常生活や大学生活などに関連のある話題について、新しい文型、単語を利用できるような質問、しかもその質問は「“什么(何)”」、「“什么时间(いつ)”」、「“哪儿(どこ)”」、「“为什么(なぜ)”」、「“怎么样(いかが)”」、「“怎么(どのように)”」などの方がよい。学習者にヒント、例え、ユーモアなどを与え、彼らを励まし、興味を引き付け、積極的に答えてもらう。できるだけ多くの人に参加させ、ある程度練習してから正解を与える。個性的な答えがあったら、多少間違いがあっても、肯定すべきだと思う。

3 ゲームを生かす授業活動

目的性のあるゲームは学習の興味を高め、授業効果に役立つ。ゲームの形式も規則も分かりやすく、実行しやすく、教育内容とうまく結びつけるような創造性、一定の挑戦性が必要だ。その形式などについても数多く紹介されたが、大学生学習者に向けて利用できそうなものをいくつかまとめてみる。

3.1 ほら吹き比べ

日常生活ではほら吹は見栄はりと思われ、好まれていないが、見方を変えれば上手なほら吹きはユーモアであり、周囲の雰囲気のを和らげる。特に授業中、学習者の多くは言い間違いに対する恐れがあるので、ほら吹きのチャンスを与えることによってリラックスさせる。極端なほらでなければ大胆に言わせ、間違いではないかという危惧も克服できるであろう。それに伴って、授業全体の雰囲気が活発になると共に、学習者の喋りたいという意欲が芽生え、話す力が上達するであろう。

A、Bグループに分かれて、それぞれ大げさで、合理性に欠ける人数分のほら文を書き集める。たとえば、「我的姐々比我的弟々小三岁(姉は弟より3歳年下だ)」、「昨天我吃了十三个西瓜、二十个苹果(昨日スイカを13個、リンゴを20個食べた)」、「明天我要去看十个小时的电影(明日10時間の映画を観に行く)」。共同で作る目的は作文の重複を避け、学びあい、交流しあう場を体験させるためである。

準備を整えたら、まずAグループの学生から一つの文を取り挙げ、Bグループの学生に挑戦する。挑戦された相手は規定の時間内に、挑戦文の不合理点を指摘して直す。正しく直せば5点を貰い、間違っていたら同グループの人に助けを求めることができるが、たとえ正しく直しても1点しかもらえなくなる。次はBグループが挑戦する番だ。順に最後までやり回し、得点の多いグループが優勝する。グループから集めた問題の中に正しい文を混ぜれば、難度を高めることもできる。

もし「喜欢(好き)」という言葉を習う時、繰り返し練習の幅を広げるため、教師は自身のこと

を例として挙げてから、学習者に教師の兄弟や親、友人などの飲みたいもの、好きなもの、興味などを当てさせる。見事的中できたら、学習者は満足感を得られるだろう。

3. 2 面白い文を競おう

面白い文を聞くと、誰でも笑うだろう。グループに分かれ、メンバーはそれぞれ主語、修飾語、述語、助数詞、目的語など一個ずつ出し合い、それらを固定の語順と要求に基づいて文に繋げる。すると必ず頓智で、おかしくて、突飛な様々な奇文が出来上がる。快い瞬間が生まれるだけではなく、単語や語順の理解と復習にもなる。

まずゲームの所要人数と時間を決める。人数が足りなければ、グループ内で2回作業に当たればよい。最初の人配られた紙に時間を表す単語、たとえば「星期六、今天、下午三点（土曜日、今日、午後三時）」と任意に記入して、その単語を隠すように紙を折り上げて、次の人に渡す。次の人が主語、たとえば「李老師、我、上帝（李先生、私、神様）」と書き加えて、その部分も隠して紙を折り上げて三人目に渡す。三人目は場所、たとえば「在游泳池、在图书馆、在北京（プールで、図書館で、北京で）」を書き足す。さらに紙を折り上げて四人目に渡す。四人目ももちろん前の内容が見えずに、動作語、「跳舞、滑冰、洗衣服（ダンスする、スキーをする、洗濯する）」など自由に加える。最後に紙をもらった人がその文を読み上げる。「星期六李老師在游泳池跳舞（土曜日李先生がプールをダンスする）」、「今天我在图书馆滑冰（今日私は図書館でスキーをする）」、「下午三点上帝在北京洗衣服（午後三時神様が北京で洗濯する）」、これらの文から、皆でもっとも、やや、まあまあなど面白い文を順次に選び出し、点数を付ける。このゲームのやり方に慣れたら、グループ内の出場順を変えて、全員最後に出来上がった文を読めるように何度も練習する。

3. 3 文造りの対抗戦

文造りはよく利用される練習方式だが、多くやると、学習者が飽きてしまう。教師が覚えてほしい単語を黒板に書き、あるいは学習者自身に覚えたい単語を黒板に書かせる。単語の意味を確認し、ゲームのルールを説明する。A、Bグループに分かれて行う。AグループがBグループの選んだ単語を使い、所定の時間内に文を作る。正しい文であれば3点貰い、間違ったら、直すこともできるが、減点になる。続いてBグループがAグループの指定した単語で文を作る。黒板の単語が使い切れるまで交互に順番に続く。グループ単位の活動であるが、できるだけグループ全員が参加し、教師は速やかにそれぞれの文を評価し、採点する。難度を高めるために相手グループの人を指名して文を完成させ、また作った文を相手グループに板書させることもできる。クラスの人数が多ければ複数のグループに分かれ、勝ち抜き戦で最後に勝った2グループが対戦し、優勝を決める。

小人数の授業であれば、学習者相互の熟知を促すため、文法点を念頭に、たとえば「比較」の文型を習うのであれば、「クラスの中で身長が一番高い人」、「〇〇に一番長く住んだ人」、「中華料理が大変好きな人」、「英語がもっとも上手な人」などの練習が楽しい。「できる」という文型の練習であれば、もし留学生がいれば、「どの国の人が『泡菜(キムチ)』を作れるのか」を見つけてもらったりする。「我喜欢汉语（私は中国語が好きだ）」という文型の練習なら、時間割の実物利用もできる。

3. 4 「3, 2, 1」の運用回路

「3」は当日の授業で完成すべき活動の数、または同一活動の繰り返し回数である。「2」は所

定の授業内容にさらに一つ加え、またはその授業内容を理解する段取りの数を指す。「1」は最後にやるべきこととなっている。新出単語の学習を例にすれば、次のいく通りかがある。

- 1) 覚えた単語を3つ、難しいと思う単語を2つ書き、文を1つ完成する。
- 2) 新しい単語を3つ、以前習った単語を2つ書き、文を1つ完成する。
- 3) 3人を指名する。1人が与えられた単語で文を3つ作る。2人が文を確認し、1つを選び、誰かに訳してもらおう。
- 4) 3人が皆の前で同じ単語の質問文をそれぞれ発表し、皆が2人の質問に口頭で答え、1つの質問を選んで問いと答えを紙に書く。

最初はやさしい練習を試し、手順に慣れたら、文型、文法などの学習にも組み込むことができる。完成された文を学生にもう一度復唱させ、または書かせる。意欲を高めるために、競うことも取り入れられる。いずれもよくできた人、早くできた人が勝者だ。

授業にPPTを利用することも紹介された。便利で板書の手間も省かれるが、学習者の学習する心理過程を疎かにする恐れがあり、語学教育では大量の使用は望ましくないと私は思う。

4. おわりに

外国語の学習では、要するに重複が記憶に役立つのである。重複の方法がよければ、学習者の上達も早い。学習者に重複を感じさせず、重複も新しい学習と思わせて学習者の興味と意欲を高めることだ。外国語の教師は実際のところ重複を教え、重複の方法を研究するのだ、とも講師が言った。

繰り返し練習、記憶を深める重複作業…、それは一種の暗誦作業でもある。日本の著名な漢文学者白川静は「暗誦というものは授業の方法としても非常に大事」で、「暗誦こそ学習の基礎、そしてボケ予防にもなる」。「それは文学の表現の一つのスタイル、様式で…その雛型が頭にあると、そういう様式でつくられているものはみな親戚に見える。そうすると類推していいって、語法的にはこれはあの句と一緒にだというふうにして、ほとんど読める」ので、「つまり解読の鍵がここにあるというわけです」¹⁾と述べている。古典の学習に関する見解であるが、外国語の学習にも通じている。暗誦までは学習者に求められないかもしれないが、せめて繰り返し、重複をこれから自分の授業にたくさん取入れようと思い知らされた。これが今回の研修で私に一番気づかせてくれた啓発である。

注

¹⁾ 白川静・渡部昇一「暗誦こそ学習の基礎、そしてボケ予防にもなる」『知の楽しみ 知の力』（致知出版社、2002、第二刷）、P161。